祖母のミルクセーキ

福永祥子

ない事が当たり前の幼い頃を過ごした私は今から思うと大変恵まれていたように思う。それでも、苦い想いも多少はよぎるわけで、たしか小学二年生だったと記憶している。

奥の座敷で頼まれ物の着物を仕立てている祖母に「ピアノが欲しい。ねえ、お婆ちゃんピアノ買うてえな」と唐突に切り出した。お金持ちの紗代ちゃん家におよばれして帰る早々のおねだりである。

祖母は私のほうは見向きもしないで、ただ黙々と針を動かしている。

二人の気まずい沈黙に、助け舟をだしたのは火鉢の前でお茶を飲んでいた祖父である。「爺ちゃんが買うてやろう」と言うが早いかパナマ帽を被ると、町へと出かけた。

それから二時間も過ぎた頃だろうか、祖父は片手に荷物を抱えて帰って来た。包みを開けると、中から玩具のピアノが出てきた。

「こんなん違う」と心の中では、半泣きだったけど、祖父の得意げな様子に私も少しずつ嬉しさがこみ上げてきて、「わぁ～真っ赤なピアノ」と、両手に抱え込んでいた。

次の日、学校で恵子ちゃん達に「ピアノ買うてもろた」と、そっと告げると、放課後、みんなして我が家にやって来た。座敷の中央に置かれてあるピアノを一目見るなり、

「なんや、玩具じゃん」

プイと横を向いて、さっさと帰ってしまった。それでも私は平気だった。玩具のピアノも本物のピアノも大した違いはない。すぐに買ってもらえたことが、どんなに嬉しかったことか。

父は再婚を機に新しい家族と遠く離れて暮らすようになり、幼い私はその後もずっと祖父母に育てられた。

昭和二十年も終わりの頃で「文化的」という暮らしがここら地方の町村にも広まり始めていた。「洗濯板」が「洗濯機」に「おくどさんとお釜」が「炊飯器」にそれまでの台所事情を一変させるように次々に電化製品が普及し、主婦たちの日常を計り知れないぐらい身軽なものにしていった。

あの頃から私達の素朴な暮らしの楽しみはどんどん変化していったのではなかろうか。

少しばかりの貯えと生活を切り詰めることで凌いでいた「ひぐらし」に贅沢など、でき

祖母のミルクセーキ

ようはずがない。
幼い私は時折祖母に真顔で聞いてみた。
「なしてうちにはお金がないんじゃろうね」
すると祖母の答えはいつもこうだった。
「ええかの、金の有る無しは時の運じゃ、長者三代続かず、貧者六代続かずというてな。見てみんさい、うちかて六代目頃には大金持ちじゃ」
と孫を相手の夢物語は他愛のないものである。しかし話の続きを祖母は真顔で諭すように聞かせることは忘れない。
「どんな貧乏をしておっても、家のお道具は大切にせんといかんよ」
新しい物が次々と変えない祖母なりの言い訳だったかもしれないが、同時に私の心の中を見透かしているようでもあった。
私はといえば美代ちゃんや康子ちゃん家の軽くて色鮮やかな食器類や日曜雑器など、台所が日増しに明るくなってゆくのが羨ましくて仕方がなかった。
「うちにあるもんは重くて古臭いもんばっかり」と時には口を尖らせて不満顔を顕にすると、祖母は続けて「代々伝わるお道具はその家のご先祖様が大切に残してくださった宝物じゃけいな」と笑顔を見せるのである。
昭和三十年代、より便利で新しいものが次々に溢れ「使い捨て」が美徳であるかのようなバブル期に差し掛かっていた。
使い馴染んだ日用品に寄せる細やかな心遣いは物に対する祖母なりの愛情であったのだろう、と今はしみじみと思い至る。

祖母はあれで、なかなか負けず嫌いの一面もあって、幼い私はよく閉口した。もちろん孫可愛さゆえのセリフだが、「よしゃ、わしが作っちゃろう」が口癖だった。
当時、「アンパン」と「クリームパン」それに「ジャムパン」は私達にも手の届く憧れのおやつだった。
五年生の夏、お呼ばれした紗代ちゃん家で不思議な味のする飲み物をごちそうになった。
早速家に帰って祖母にねだった。
「お婆ちゃんミルクセーキを作ってよ」
祖母は私の身振り手振りの説明を真顔で聞き入っていたが即座に「よしゃ、わしが作っちゃろう」と台所に立つとなにやらガチャガチャやりだした。
で、祖母の苦心のミルクセーキはラムネに卵と砂糖を少しずつ加えて出来上がったものだった。
「どうじゃ、旨かろう」

祖母のミルクセーキ

得意げに私の怪訝なそうな顔を何度も覗き込んだ。
その後「あのミルクセーキまた作ろうかいのう」と何度か誘いをかけたが、私は仕方なしに一度だけは「う～ん」と頷いた。
今頃になって「もっとせがめば良かったなあ」と、あの甘ったるいラムネの味と得意げだった祖母の横顔がしきりと思い出される。
中学一年生の時、やはり友達の家で「プリン」というハイカラのものを初めて口にした。
家に帰ると早速祖母に「プリン作ってえなあ」とせがんでみた。
私が話し終わると祖母は大きく笑いだし、こう言った。
「何じゃあ、具の入っていない茶碗蒸しのことじゃろう」
それから「ちょっぴり、砂糖を入れるのがコツじゃねぇ」と続けた。
こちらのほうは本物とあまりかけ離れた味ではなくて、何度か「うちは茶碗蒸しよりプリンがええ」と催促をした。
その後も何度か「似て非なるもの」を味わう羽目になったが「なんでも工夫してみるもんじゃ」と得意げだった祖母の笑い声は今も耳底にはっきりと残っている。

平成も終わり「令和元年」と言われる今日。あの頃よりも時代は、さらに大きく変わってしまった。
二十四時間営業のコンビニエンスストア。細々とした生活用品はなんでも揃うスーパーマーケットなど。
都心も地方も生活の水準にさほどの差はなく、お金さえ出せばなんでも揃うデパートはもう珍しい存在ではなく、実に便利で安直な暮らし方が当たり前になってしまった。
祖母のように、まずは工夫してみるという健気な人達は随分と少なくなってしまったのだろうか。
例えば、マスク一つにしても祖母なら嬉々として言いだすことだろう。
「そんなもんわしが作っちゃろう」と。
真新しいタオルを半分ぐらいにカットして小さく折りたたみ「ほれ出来たがの、おまけにこっちは面白い図柄入りじゃけえ」と何枚も差しだすに違いない。
「工夫すればなんでもできるもんじゃ」
すまし顔で付け加えることも忘れない。

終日、陽の当たる縁側に腰を下ろし、「仕立費がようけ入ったけぇ、お寿司でもこしらえようかの」と学校から帰ったばかりの私を振り返る祖母の丸い背中が今も鮮やかに脳裡に浮かぶ。

祖母のミルクセーキ

「お道具類は大事にせんといかんよ」幼い頃から口癖のように聞かされて育ったお蔭かもしれないが、知らず知らずのうちに私の価値観に大いに影響を与えている。

見た目だけの華やかさや、その場限りの便利さよりも、本質的な道具への見極め方、大袈裟に言えばお金に換算できない美意識のようなものまで育ててくれていたのだろうか。

日用品や雑多の品物一つでも大切に扱う祖母の優しい眼差しは「ホンマモン」の愛着だったのかもしれない。

便利すぎて何でも、すぐに手に入れてしまう私たちは同時に「愛着」という心根を忘れてしまったのではないだろうか。飽きたらすぐに捨ててしまう。

むしろ、過剰ともいえる消費文化の暮らしの中で私たちは「何か大切なもの」を失いつつあるような気がしてならない。

明治に生まれ昭和の激動を辛うじて生き抜き、貧しさの中で生を閉じた祖母のささやかな日常は半世紀以上も経ったこの頃になって何よりも豊かな教えのように、私を満たしてくれている。